

# ブルガータ訳聖書『ヨハネ福音書』より：接続法半過去の起源（ラテン語とフランス語 古典作品を素材に(15)）

著者	秋山 学
雑誌名	ふらんす
巻	90
号	6
ページ	46-47
発行年	2015-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00153857">http://hdl.handle.net/2241/00153857</a>

# ラテン語とフランス語

古典作品を素材に【15】

ブルガータ訳聖書『ヨハネ福音書』より ― 接続法半過去の起源 ―

秋山 学

今月はブルガータ訳新約聖書の『ヨハネ福音書』からテキストを選んでみましょう。

**原文** Haec locūtus est Iēsus ; et sublevātīs oculīs suīs in caelum dīxit : « Pater, vēnit hōra : clārificā Filium tuum, ut Filius clārifīcet tē, sicut dedistī eī potestātem omnis carnis, ut omne, quod dedistī eī, det eīs vītā aeternā. Haec est autem vīta aeterna, ut cognōscant tē solum vērum Deum et, quem mīsistī, Iēsum Christum. Ego tē clārificāvi super terram: opus cōsummāvi, quod dedistī mihi, ut faciam; et nunc clārificā mē tū, Pater, apud tēmetipsum clāritāte, quam habēbam, priusquam mundus esset, apud tē». — *Evangelium secundum Ioannem*, 17, 1-5

**仏訳** Ainsi parla Jésus, et levant les yeux au ciel, il dit : « Père, l'heure est venue : glorifie ton Fils, afin que ton Fils te glorifie et que, selon le pouvoir que tu lui as donné sur toute chair, il donne la vie éternelle à tous ceux que tu lui as donnés ! Or, la vie éternelle, c'est qu'ils te connaissent, toi, le seul véritable Dieu, et celui que tu as envoyé, Jésus-Christ. Je t'ai glorifié sur la terre, en menant à bonne fin l'œuvre que tu m'as donné de faire. Et maintenant, Père, glorifie-moi auprès de toi de la gloire que j'avais auprès de toi, avant que fût le monde. »

**訳** イエスは以上のように述べた。そして目を天に向けて上げると次のように言った。(父よ、時が来ました。あなたの子を輝かせて下さい、子があなたを輝かせられるように。あなたが子に、あらゆる肉に対する権能を与えたのと同じように。それは、あなたが彼に与えたすべてに関して、彼らに永遠の生命を与えることができるためです。永遠の生命とはこのこと、すなわち彼らが、あなたこそ唯一なる真の神であり、あなたが遣わしたイエスこそキリストであると知ることです。わたしは地上にあって、あなたを輝かせました。すなわち、あなたがわたしに、果たすべく委ねたすべての業を、わたしは成し遂げました。ですから今、父よ、わたしをあなたの御前で、世が成るよりも前にわたしがあなたの御前で持っていた栄光によって、輝かせて下さい)。

最後の一文に注目しましょう。この文章を単純化すると « clārificā mē clāritāte, quam habēbam, priusquam mundus esset » 「わたしを、世が成るよりも前にわたしが持っていた栄光によって輝かせて下さい」となるでしょう。この文章では意味上、quam に始まる関係代名詞節が末尾の esset までを含み、この節の中では habēbam が主動詞、esset が priusquam に導かれる副文(この場合は時間節)中の動詞、ということになります。

さてラテン語では、副文中の動詞が接続法に置かれる場合、その活用形の時称は「相對時称」となり、主文の動詞の時称に対応して定まります。その規則を「時称対応」と呼びますが、これは、①主動詞の時称が a 「本時称」(現在もしくは未来)なのか b 「副時称」(過去)なのか、②副文中の動詞行為が、主文の動詞行為に対して a 「同時」(「以後」を含む)なのか b 「以前」なのか、という二項に基づく規則です。本文では、主動詞は直説法未完了過去形であり「副時称」に属します。一方「世が成る」云々というのは「想定内容」であるため、副文中の動詞は接続法に置かれ、かつ副文は主文に対して「同時」(ないし以後)的關係にあります。従って① b × ② a となり、そのような場合、本文のように、副文中の動詞活用形はイ) 接続法未完了過去に置かれます。ちなみに副文中の動詞形は、① a × ② a ならア) 接続法現在、① a × ② b ならウ) 接続法完了、① b × ② b ならエ) 接続法過去完了となります(ア～エがラテン語の接続法四形)。

一方フランス語の接続法には、現在・過去、半過去・大過去の四形があり、上掲の仏訳では、この箇所は “avant que fût le monde” となっていて、fût は接続法半過去形ですね。フランス語における接続法半過去の語形は、ラテン語における接続法過去完了形の残影を留めています(仏 fût < ラ fuisset)、接続法半過去の1人称単数形は「単純過去の2人称単数形に se を加えれば得られる」と習います。フランス語の単純過去形はラテン語の直説法完了形に相当し、ラテン語の接続法過去完了形の語幹は、ラテン語直説法完了形の語幹と同一であるため、この説明は言語学的に適正なものです。

ただフランス語では、ラテン語にあってはまだ見られなかった複合形、つまり助動詞の avoir もしくは être に動詞の過去分詞を添えて形成する動詞活用形が出現します。従って、フランス語における接続法過去形は avoir / être の接続法現在形 + 過去分詞、接続法大過去形は avoir / être の接続法半過去形 + 過去分詞という語形になります。

こうして見ると、ラテン語の接続法四形のうち、語形の上でフランス語に移行しているのが、最初と最後に当たる現在形と過去完了形だということに改めて気づきます。統語論の上では、本文のように、ラテン語の接続法未完了過去に対して、フランス語でも(複合形ではなく)単純形である接続法半過去が用いられ、伝承が持続していると言えます。ただ語形の上では、ラテン語の接続法諸活用形の間の差異を、より明確に伝承する必要があるという意識が働いたのかも知れません。

(あきやま・まなぶ)